救いに至るローマ書の道（３）神の愛のかたち　　ローマ５章６～11 節

「救いに至るローマ書の道」この学びは、ローマ書の五つの箇所からキリストの救いを説明するものです。それは私たちが救われてどれほど豊かなものを得ているのかということを知るということでもあります。きょうは三番目、ローマ 5:8 に光をあててキリストによる救いは何を私たちにもたらすのかを考え、主に賛美と感謝を捧げたいと思います。ここには、「しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。」とあって、キリストの救いによって、私たちにもたらされるものが教えられています。それは、「神の愛」5 節、「神との和解」10 節、そして「喜びの生活」11 節です。

先ずイエス・キリストの救いは、私たちに「神の愛」を与えてくれます。私たちは誰もが、誰かに愛され、誰かを愛したいという願いを持っています。どうして私たちが怒ったり、憤ったりするのでしょうか。愛されていないと感じるから怒るのではないでしょうか。また私の愛を分かってくれていないから怒るのではないでしょうか。愛すること、愛されること、なぜ私たちはそれにこだわってしまうのでしょうか？　それは、人が神によって、神のかたちに、神に似たものに造られたからです。聖書は「神は愛です」ヨハネ第一 4:16 と言っていますが、人が神のかたちであるなら、「人は愛です」とも言うことができます。愛の神は、人が愛の心を持ち、愛の行いに生きるときに一番幸せになるように人を造られたのです。

愛といっても、様々な愛があります。親子の愛や兄弟姉妹の愛、男女の愛、夫婦の愛、また、友情などです。けれども、私たちは、神の愛を知るまでは、どの愛にも満足できませんでした。というよりもどの愛も不十分であり、限界があります。この人のためなら死んでも良いとさえ思って結婚しますが時の経つ間に「この人のために死んでなんかいられるものか！」などと思うのです。目に入れても痛くないほど思い入れのあった子供ですが、わたしはあんなに愛を注いだはずなのに、もうやめてくれと言うほど痛みを与えてくるのです。どうしてそうなるのでしょうか？　その原因は罪のために人間の愛が歪められているからです。本来、愛は無条件なものなのに、人間の愛は罪の影響で条件つきの愛になってしまいました。条件付きの愛とは「だから」の愛や「もしも」の愛です。「あなたは素敵だから、賢いから愛する」、「もしも、億万長者だったら、私の言うことを全部聞いてくれたら、愛するのだけれど…」といったようにです。なお性質の悪いことに、自分のことを棚の上にあげておいて人を理想化してしまうのです。当然、理想の人はいませんから「そんな人とは思わなかった」「何故そんなことが出来ないのか？」と思ってしまい、それでまた怒るのです。まるで自家発電装置のようなものです。

少し前まで、日本では結婚相手の男性に「三高」を求めていました。「高学歴、高収入、高身長」のことです。最近は「三優」だそうです。「家族に優しい人、自分にだけに優しい人、家計に優しい人（お金を家にたくさん入れてくれる人）」のことです。期待するのは勝手ですがそんな人はどこにもいません。しかし神の愛は、人間の愛と違って無条件の愛です。それは「にもかかわらず」の愛です。人が罪を犯して神に逆らった「にもかかわらず」、神の聖さ、正しさを汚している「にもかかわらず」、臆病で、気まぐれで、疑い深い「にもかかわらず」、神は、人を愛してくださいました。聖書はこう教えています。「私たちがまだ弱かったとき、キリストは定められた時に、不敬虔な者のために死んでくださいました。正しい人のためにでも死ぬ人はほとんどありません。情け深い人のためには、進んで死ぬ人があるいはいるでしょう。しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。」(6-8 節）キリストは正しくもなく、情け深くもない不敬虔な罪人を、この私を愛してくださったのです。「まさか、あんな人が愛されるわけがない」と言われて当然の者を神は愛してくださったのです。神の愛は「まさか」の愛だと言ってもよいでしょう。

私たちはキリストを信じるまで、この愛を知りませんでした。しかし、イエス・キリストを信じた時、この神の愛が分かりました。知識として知ったというのではありません。体験したのです。ローマ 5:5 に「なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです」とある通りです。私たちは、それによってはじめて、本物の愛、変わらない愛によって愛されたいというたましいの奥底からの願いを満たされました。キリストの救いは、私たちに、この神の愛を与えてくれたのです。

第二に、キリストの救いは、私たちに神との「和解」をもたらしました。神との「和解」なしに、私たちは神のもとに行くことができません。罪が、神の聖さを汚し、神の正義を踏みにじり、私たちと神との関係を壊してしまったからです。

ほとんどの人は「死んだら天国に行く」と考えていますが、それはそんなに簡単なことではありません。「天国」、それは「天の御国」を短くした言葉で、聖書で「天」は「神」のことですから、「天国」とは「神の国」のことです。そこは聖なる神と、罪のない御使いたち、そして聖徒たち、正しい人々だけがいるところ、罪のない場所です。罪を持ったまま誰ひとり天国に行くことはできません。天国に罪があればそこはもはや天国でなくなってしまいます。神は、罪人をも愛して天国に迎え入れたいと願っておられますが、私たちが持っている罪が処理され、罪によって壊された私たちと神との関係が修復され、回復されなければ、私たちは天国に入れないのです。人間は、自分の罪を処理し、神に近づくために様々な努力をしてきましたが、そのどれも成功しませんでした。しかし、キリストの救いだけがこの問題を解決しました。しかも、それは、私たちの罪が赦されるだけでなく、罪のために壊れてしまった神との関係をも回復したのです。罪の赦しと神との関係とは別のことです。自分がある人に罪を犯してしまい、その人に赦して欲しいとします。相手が「あなたの罪を私は寛大な心で赦し、無いことにします。ただし、もう二度と私の前に顔を見せないでほしい。金輪際、あなたの顔を見たくない。」と言われたらどうでしょうか？複雑な思いになりますね。罪は赦してもらえて感謝です。でも関係は切れているんだな。じゃーやっぱり赦してもらえてないのではという思いさえ湧きます。しかし、キリストの救いはそのような不完全なものではありません。9 節と 10 節にこう書かれています。「ですから、今すでにキリストの血によって義と認められた私たちが、彼によって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです。もし敵であった私たちが、御子の死によって神と和解させられたのなら、和解させられた私たちが、彼のいのちによって救いにあずかるのは、なおさらのことです。」「義と認められる」ということは罪の赦しですが、「和解」とは神との関係が修復することです。

もう少し説明します。人は、神に最も近い者として造られ、神の栄光にあずかる者でした。ところが、罪のために、神から与えられた正しさ、聖さ、また、神の前での立場を失ってしまいました。ローマ 3:23 に「すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができず」とあるように、神の栄光からほど遠いものとなりました。しかし、イエス・キリストは私たちの罪を赦し、私たちを神の前に義なる者、聖なる者、神の子どもとしてくださいました。ローマ 3:24 に「ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められるのです」とあるとおりです。義と認められるとは罪が赦されということです。しかし関係はまだできていません。罪の問題は解決されても、私たちが壊してしまった神との関係はまだ回復されていないのです。神の前に出るにふさわしい者とはなっていないのです。そのためには自分自身が神の前に立つにふさわしい立場、つまり自分の側で神の正義、神の聖さ、神の栄光が満たされなければならないのです。しかし、罪ある人間には誰一人、そのことが出来ません。それができるのは、イエス・キリストただおひとりです。旧約時代、神との交わりを回復するため、なだめの供え物がささげられ、それは「和解のいけにえ」と呼ばれました。10 節で「もし敵であった私たちが、御

子の死によって神と和解させられたのなら…」とあるのは、罪ある者、かつて私たちは神の敵であったのです。そして御子の死、つまりイエスが「なだめの供え物」、または「和解のいけにえ」となってくださったのです。それをもって私たちは神との関係が出来、キリストのからだとして「ひとつ」とされるのです。キリストは、私たちが損ねた神との関係を回復し、私たちと神をひとつにするためにご自身を献げてくださったのです。それによって、私たちが神のもとに立ち返る道、天への道が切り開かれたのです。キリストによって神の前に堂々と立てる者となったのです。

第三に、キリストの救いは私たちを「喜び」で満たしてくれます。11 節に「そればかりでなく、私たちのために今や和解を成り立たせてくださった私たちの主イエス・キリストによって、私たちは神を大いに喜んでいるのです」とあります。初代のキリスト者の特徴のひとつは「喜び」でした。イエスは「喜びなさい。喜びおどりなさい」マタイ 5:12 と教え、パウロは「いつも主にあって喜びなさい。もう一度言います。喜びなさい」ピリピ 4:4 と言い、ペテロも「あなたがたはイエス・キリストを見たことはないけれども愛しており、いま見てはいないけれども信じており、ことばに尽くすことのできない、栄えに満ちた喜びにおどっています」ペテロ第一 1:8 と書いています。キリストの救いは私たちに、喜びの生活、喜びの人生を与え、天の永遠の喜びへと導いてくれるのです。

「喜び」の反対は「悲しみ」だと思われていますが、聖書の教えから言えば、「喜び」の反対は「恐れ」です。「悲しみ」は確かに当初辛いものですがやがて「喜び」に変わる可能性が高いものです。また悲しみは人を成長させることもあります。主イエスも悲しむ者を憐れまれました。しかし、「恐れ」は「喜び」を消し去ります。罪ある者は聖なる神の前に立つことができません。いつも、罪の罰に恐れていなければなりません。しかし、イエス・キリストは私たちの罪を赦し、義の衣を着せ、神の前に立たせてくださいました。自らが「和解のいけにえ」となって、私たちに神との和解をもたらしてくださいました。ですからもう「恐れ」ることはありません。今後、私たちは困難な状況に直面して、慌てたり、迷うこともあることと思います。失敗をして、気落ちしてしまうこともあるでしょう。一時的に喜びが消えてしまうようなこともあるでしょう。けれども、キリストがくださる「喜び」は消えません。イエスが「あなたがたにも、今は悲しみがあるが、わたしはもう一度あなたがたに会います。そうすれば、あなたがたの心は喜びに満たされます。そして、その喜びをあなたがたから奪い去る者はありません」ヨハネ 16:22 と言われたとおりです。

イエスの十字架にこそ神の愛があり、神との和解があります。この愛を受け入れましょう。この和解にやすらぎましょう。その時、私たちは「恐れ」を追放し、「思い煩い」を捨て、神との平和に憩うことができ、そこから生まれる「喜び」に生きることができるのです。このように私たちは主イエスを救い主と信じ、受け入れた時に救われ、豊かなものをいただいているのです。救いの道は「喜び」の道です。この道を進み、さらに大きな「喜び」へと導かれていきましょう。